

◆義士銘々伝一 書き下し文

【浅野内匠頭長矩】

浅野内匠頭長矩

常に溫柔にして仁愛厚く、義を重じ忠を守り、文武兼備の勇壮の将たりといへとも、数度の恥辱憤りに堪ず、国を失ひ命を失ふ、節に臨て席を論ぜざるハ武士の常なるへし、

冷光院殿前少府朝散大輔吹毛玄利大居士

【大石内蔵助良雄】

大石内蔵助良雄

夫忠ハ、豈惟君に奉じ、身を忘れ色を正し、辞を直し難に臨ミ、節に死するのミならんや、命を全ふし、君の為に一所懸命の時に臨て、志しを遂るを以て誠忠の臣と云べし、主家滅亡に及び、良雄亡君の遺命を守り、志し金鉄の如き誠忠の義臣をえらミ、盟約を堅して、竟に本懐を遂け、名を累代に耀せり、

忠誠院刃空浄 劍居士

【堀部弥兵衛金丸】

堀部弥兵衛金丸

金丸八年七旬を過せども、壮健にして武備に委き勇強の士なり、刃毛知劍信士

【木村岡右衛門貞行】

木村岡右衛門貞行

辞世 武士の道とばかりにひとすじに おもひたちぬる死出の山道
刃通普劍信士

【赤埴源藏重賢】

あかきげんざうしげかた
赤埴源藏重賢

重賢ハ剛勇の生質にて、力業を好ミ武術に通曉す、赤穂離散に及び、大石に誓約して関東へ下り、初め芝町に矢田五朗右衛門と合住にて借家す、大酒を好ミて満酔せざる日ハなし、討入の時も酒を徳利に入れ、腰に付て働きけるとぞ、稀代の豪傑なり、

刃広忠劍信士

【矢田五郎右衛門助武】

やだごらうゑもんすけたけ
矢田五郎右衛門助武

助武ハ赤埴源藏と俱に芝に住し、巖島の社家の旅宿なりと披露なし、二人とも日毎に酒宴のミ楽ミ居たりけるゆへ、誰あつて敵を狙ふものと心付ものなかりしとぞ、泉岳寺へ引取の時、近辺の者源藏五朗右衛門を見て驚き誉けるとなり、

刃法参劍信士

【富森助右衛門正因】

とみもりすけゑもんまさより
富森助右衛門正因

正因ハ馬術の妙を得て遠乗に馬の労るゝ事なしとぞ、飛こんて手にもとまらぬあられ哉 富森春帆

刃勇相劍信士

【片岡源五右衛門高房】

かたおかげんこゑ たかふさ
片岡源五右衛門高房

高房ハ片岡六右衛門の養子なり、高貞の寵臣にして、数度君を諫けれども詮なく、高貞切腹の砌遺言を受けて、大石に伝へ本国に馳

行て、籠城殉死に志を決す忠勇の士なり、
刃勘要劍信士

【堀部安兵衛武庸】

堀部安兵衛武庸
武庸ハ劍術の達人にして手跡をよくす、武庸生涯に敵を三度討し
とぞ、古今稀なる豪傑たり、

刃雲輝劍信士

【間十次郎光興】

間重次郎光興

光興ハ東国定府の者ゆへ、離散して后、本所に借家なし、杣屋半
七と変名なし商人となり、小間物をあきなひ、敵邸の様子を伺ふ、
兼て亡君の敵師直の首級我手に採ずんバ、生て再び墓前に到るま
しと、目黒不動尊に誓せし、示現にや終に其詞を果し得たり、
俳諧を嗜て名を竹平とよべり、
淡雪やあとから野辺に青い草

刃袖払劍信士

【不破数右衛門正種】

不破数右衛門正種

正種ハ武芸に執心して劍術に達し、居物切の上手なり、試斬に長
じ君の勘気を蒙り、流浪して浪花に在しに、赤穂の凶変を聞、
籠城殉死せんと馳行けれども、大石是を許さず、盟約に加りける
に、妻病ひに死せり、当年六才なる大三郎を伯母の方へ預け、夫よ
り関東に発足なし、終に本懐を遂る、

刃観祖劍信士

【小野寺十内秀和】

小野寺十内秀和

秀和ハ武芸軍慮の学まなびに委くわしく、風流ふうりゅうに遊あそびて和歌わかを善よく、
辞世しに なからへて花はなを待まつべき身みならば 猶なほおしまるゝ年としの暮くれかな

刃以串劍信士

【武林唯七隆重】

武林唯七隆重

隆重ハ武芸ぶげいことぐく通達つうたつし、力量りきりやうつよ強がうき豪傑ごうけつなり、されども孝心かうしん
深く、父ちちにハ早はやく送おくれ老母らうぼを勞いたハ、孝養かうやうの功こうなること、女子によしの介抱かいほう
するか如ごとし、母ははハ主君しゅくんの乳母めのとにて、高貞たかちかと乳兄弟ちちけうたい也、大石おおいし報讐ほうしゅうめい盟約めいやく
の事ことを老母らうぼ推察すいさつなし、唯七たふ関くわん東発足とうほつそくの事ことを悦よろこび、旅たびの調度てうどを取揃とりそろ
へ、前夜ぜんや自害じがいして死しせり、

辞世の歌しぜのかに なきあとにかたミをとみよそでのつゆ なミだにかす
むおぼろよの月つき 行年ぎやうねん七十二才にじふにさい

隆重夜討りゆうじやうたうの節せつ、親おやの怨魂おんこんを慰なぐさめんと、遺物かたミの小袖肌こそてはたを放はなさゝりし
とぞ、

刃性春劍信士

※「遺物」の振り仮名は推定して付けました。

【磯貝十郎左衛門正久】

磯貝十郎左衛門正久

正久ハ元愛宕山もとあいだうやま教学院けがくいんの小姓しやうじやうなりしか、武備ぶひを好このミ克長よくちやう刀たうの術じゆつを
得えたりと聞きて、高貞たかちか所望しよぼうせられ召抱めしかへられし新参しんさんの近臣きんしんなり、され

と誠忠ゆへ大石報讐の列に加へしとなり、
刃因求劍信士

【神崎与五郎則休】

神崎与五郎則休
則休ハ幼き頃より武芸を執心なしければ、克其妙を得たり、勇氣あれども常に溫柔にして、書を読風流を樂とす、
梓弓倭の道へ踏も見し 小手指原に雪ハ降つゝ

刃利教劍信士

【村松三太夫高直】

村松三太夫高直
高直ハ武術に達し、流浪のうちも両親に孝心ふかき誠の士なり、
刃清元劍信士

【岡野金右衛門包秀】

岡野金右衛門包秀
包秀ハ父金右衛門の三男なり、故有て幼より僧となりしが、兄九十朗病ひに死せり、還俗して九十朗と呼り、父金右衛門忠義一凶の士といへども、老衰ゆへ息九十朗を金右衛門と改、大石に頼ミ終に病死せり、包秀父の遺命をつぎ忠義に死せり、

刃回逸劍信士

【倉橋伝助武幸】

倉橋伝助武幸
武幸ハ前原伊介と俱に小切商人と姿を省し、本所に住し敵邸の様子を搜り、吉良より上杉家へ通路の術を心付しとなり、実に誠忠の士

也、

刃鍛錬劍信士

【寺坂吉右衛門信行】

寺坂吉右衛門信行

信行の祖父ハ常陸国麻生五丁田村の産なり、浅野家に仕へて吉田忠左衛門の組下の足輕小頭を勞む、其身小禄にして輕しといへども義士の列に入、復讐の為に苦心を為す、適誠忠と謂へし、

刃道喜劍信士